

—失われた都市の記憶を求めて—

美術市



発見

第八回

橋爪節也

大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室・主任学芸員

おおさか美術館ストーリー

商都の博覧会で

花ひらいた美の殿堂



取材協力：関西医科大学

関西医科大学教養部大講堂に移設されている  
大阪府立博物館美術館の天井画

日本人は、“美術館”を生活に無用で空疎な、「箱物」のイメージでとらえがちだが、世界の主要都市では、芸術的感動で人に生きる喜びや力を与える場であり、歴史を伝える教育機関であり、観光の拠点でもある。“美術館”こそ、ソフトそのものだ。都市を人体に譬えるなら、街の賑わいの記憶や感性を司る神経系統、脳の一部といえるかも知れない。さて大阪では？

大阪最初の「美術館」という名称の建物は、本町橋東詰の大阪府立博物館に明治二十一年（一八八八）建設された「美術館（博物館中央館）」である。上田耕冲らがこの建物に描いた巨大な天井画が、関西医科大学に移されて現存している。大阪二番目の「美術館」は、明治三十六年（一九〇三）の第五回内国勸業博覧会で建設された美術館で、博覧会では洋画、日本画から彫刻、工芸、写真、印刷物など、膨大な点数の作品が展示された。建物は、博覧会終了後も大阪市立の大阪市民博物館として利用された。

この二館は明治時代らしく殖産興業的な面が強かったが、次に大正九年（一九二〇）の市議会で建設が議決され、東京、京都を抜いて、日本最初の公立美術館となるはずだった現在の大阪市立美術館が登場する。大正十四年（一九二五）に誕生する日本最大の都市「大大阪」を文化面で支えるための美術館で、開館は昭和十一年（一九三六）にずれ込んだが、学芸員中心の企画・常設展を主体に、作品を美しく鑑賞するための採光にも配慮する「近代美術館」を謳うのが先進的であった。

この新館建設について日本放送協会の伊達俊光は、「わが大阪市の如き物質万能の社会」において「厳然たる精神的の美の殿堂」として重大な任務を果たし、「美術館が発揚する芸術的雰囲気がこの物質の塵都を幾許なりとも浄化」することを期待した（大阪毎日新聞）。



「府立博物館案内図」(部分)

大阪歴史博物館 蔵

初代大阪府庁(幕末の西町奉行所)が明治8年(1875)に「博物館」となり、明治17年(1884)に「大阪府立博物館」となった。本町橋東詰、現在のマイドームおおさかや商工会議所、シティプラザ大阪がある場所である。「案内図」の手前が東横堀川で、中央にあるのが「美術館(中央館)」。なお、大阪市立動物園の前身もこの博物館にあり、新しく市立動物園の開園のとき、象がここから天王寺公園まで歩いて移動したという。

# 大阪府立博物館 美術館(中央館) 1888



昭和12年(1937)、旧博物館の美術館が取り壊されることになり、それを借し、天井画は、枚方市牧野の大阪女子高等医学専門学校(現在の関西医科大学教養部)の講堂に移転された。このとき周囲の小壁や天井を飾っていた縦横各約3mある飛天、天馬、四神など22面も同校に移った。これらの図柄も、法隆寺献納「龍首水瓶」(東京国立博物館所蔵)、法隆寺金堂壁画、正倉院「白石鎮子」などの古代美術から転用している。



楕円形の画面に、龍と鳳凰を描いた縦約15m、横約6mの巨大な天井画。上田耕冲(1819~1911)を中心に櫻井香雲、上田耕甫、渡邊祥益、森閑山らが描いた。図は、法隆寺献納の「盤龍鏡」(東京国立博物館所蔵)の模様を用いる。府立博物館時代の写真と比べると、現状は移転の時に絵の一部が切り詰められている。



府立博物館時代の天井画写真

資料提供：関西医科大学



天井画の中心部分

戦後は、吉原治良の「グタイ・ピナコテカ」のような個性的な民間の現代美術館が出来たほか、万国博美術館を府立現代美術館として再開する運動を在阪の美術関係者が進め、府立では実現しなかったが、昭和五十年(一九七五)に国立国際美術館として開館した。現在は中之島に移転。昭和五十七年(一九八二)には、安宅コレクションの寄贈で大阪市立東洋陶磁美術館も開館する。最後に残されたのが、市制百周年記念事業の大阪市立近代美術館(仮称)である。四千点近い収集作品には、佐伯祐三の油彩画など文化財クラスも多いが、準備室開設以来、十八年が経過しても、いまだ蜃気楼のように漂っている現状を、泉下の伊達俊光は何と評するのか？

いや、その評価は過去や現代ではなく、未来の市民に委ねることにしよう。



第五回内国勸業博覧会 資料提供：大阪市立中央図書館  
噴水塔より美術館を望む。背後は大林組の高塔、横の巨大な樽の形の建物は、麦酒会社のパビリオン



第五回内国勸業博覧会 絵はがき 資料提供：大阪市立中央図書館  
中央が博覧会正門、右側奥が美術館と大林組の高塔、左の天守閣は名古屋城を模した愛知県の売店、遠く四天王寺の五重塔が見える



第五回内国勸業博覧会 美術館の外観

明治36年(1903)、天王寺公園で開かれた第五回内国勸業博覧会は過去最大の内国博であり、エレベーターのある高塔や、冷蔵庫、ウォーターシュートなども登場した。イルミネーションで飾られた夜景も美しく、5カ月間で400万人以上もが入場する。会場内の高台に建てられた美術館(現在の天王寺公園・植物温室あたり)には、全国から公募された日本画・洋画・工芸・写真・印刷物が陳列された。作品の質においては玉石混濁だが、日本画だけでも500点近くが展示された大展覧会であった。博覧会中、大阪の画家たちも大いに盛り上がったらしい。この建物は、博覧会終了後、大阪市民博物館として利用された。市民博物館の歴史は、現在の大阪城天守閣へ続いていく。

資料提供：  
大阪市立中央図書館

1903

## 第五回内国勸業博覧会美術館



美術館の内部



美術館内部の展示風景。建物は欧風で立派だが、ところせましと作品が並べられ、柱からはみ出して額を掛けたり、壁面も作品を上下に二段掛けするなど、展示方法としては観賞に対する配慮がなされていない。いかにも明治時代の美術館での展示の雰囲気を感じている。

—失われた都市の記憶を求めて—

美術  
都市

大阪 発見 第八回

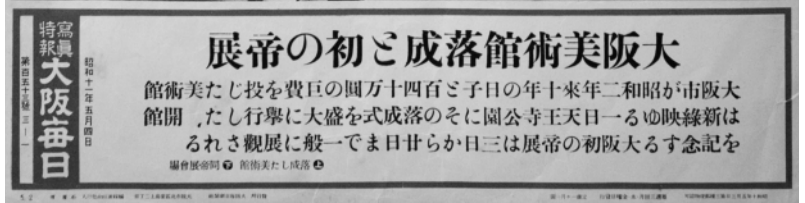
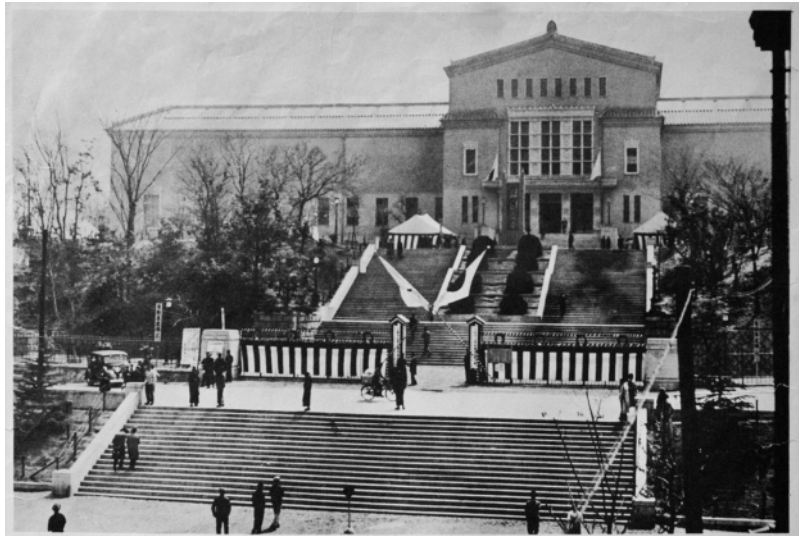
1936

# 大阪市立美術館



現在の  
大阪市立美術館

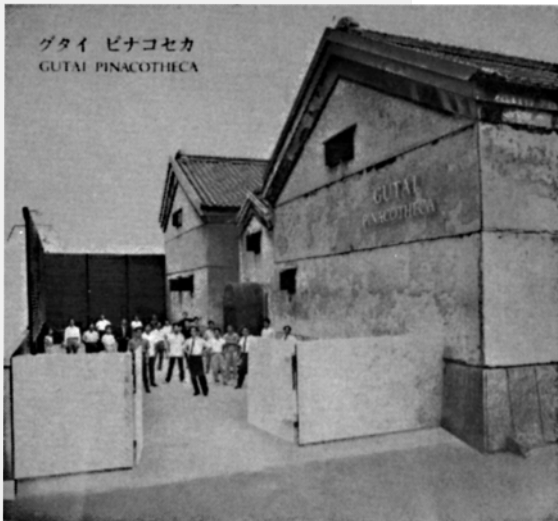
市議会での建設議決以来、関東大震災やら大恐慌やらの苦難を経て、16年間を費やし開館した大阪市立美術館。大正14年(1925)周辺地域の編入で大阪市が「大大阪」になることも念頭に、文化都市建設を目指しての建設であった。右の写真は紅白の幕を巡らした記念すべき開館の日を報じる新聞。落成記念展に改組第1回常設展を招いた。



大阪市立美術館の開館を伝える写真ニュース(1936年5月4日)

下の写真は落成記念の改組第1回常設展。出品作の橋本関雪《唐犬図》、児玉希望《枯野》を同館は購入する。

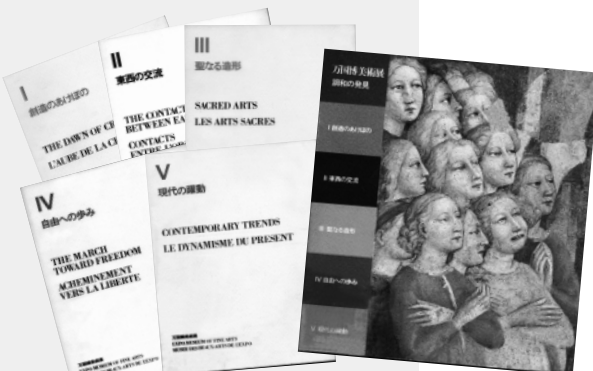
## グタイ・ピナコテカ 1962



グタイ・ピナコテカのパンフレット表紙(1962年)

(「生誕100年記念 吉原治良展」図録、2005より)

前衛的作家を結集した「具体美術協会」のリーダーであった吉原治良は、昭和37年(1962)、自ら社長をつとめる製油会社の蔵を改造し、「グタイ・ピナコテカ」を開館する(写真は「ピナコセカ」となっている)。「ピナコテカ」とは「絵画館」を意味し、中之島の朝日新聞社の西側、現在の阪神高速道路の入口付近にあった。吉原を中心に、具体美術協会の新進気鋭の作家たちが「グタイ・ピナコテカ」で展覧会を開催し、大阪の新しい美術の拠点となった。



万国博美術展の図録『調和の発見』  
(〜と名品集、1970年)

## 万国博 美術館 1970



1970年大阪で開催された日本万国博覧会では、世界中から、原始美術をはじめレンブラント、ゴッホ、ピカソにいたる名作を集めた展覧会が万国博美術館で開催された。万博終了後、大阪の美術関係者はこの建物を利用して、大阪府立現代美術館として再開するよう要望したが、国立での再開はかなわず、国立の「国立国際美術館」として昭和52年(1977)にオープンした。平成16年(2004)には中之島に移転し、最初の万国博美術館の建物は取り壊された。

写真提供：日本万国博覧会記念機構